



六
花

2

2021

りっかはいくかい

千載具眼徒埃



山田六甲

追悼 直子さん

紫は逆縁の色冬薔薇
三日の夜尾上神社の前通り
風花や祖谷の河原の平ら焼
春雪に飾られ重しかづら橋
稲美野に大晦の月満ちぬ
なべさだと雪の降る夜はハランベぢや
大切株二月の雨に濡れにけり
凍蝶の何に執着してをりぬ
カナリアを籠に雪降る地へ渡る

ハランベはスワヒリ語で(がんばろう)

千

稲美野の果は日岡や亥巳籠
窓前に向はば雪の匂ひかな
榆の樹の切株化粧ふ春の雪
杓ひさかきの括られ加古の物ものしづめ鎮
松明あけの長次郎寿司雨上り
おばこから雪中田植に来いといふ
初雪の草鞋を舐める法華かな
野を焼いて唐招提寺遙かにす
山茶花の雪落したる一羽かな
落雁の今まさに湖踏まんとす
跳ぶ鶏に鼬はつひに追つけず

行きたしと

返り花



笹村政子

秋を病み日替りメニュー一巡す

十三夜窓辺にはづす腕時計

陶工の手許明りや日短

短日の膝に来てゐる温みかな

たなびける朝の船笛冬木の芽

留守の娘の鍵さがしをり返り花

鍵盤に戻りきたりし冬日かな

照り返す日のやはらかに冬椿

冬麗や高々とももの干されあり

生家なき土手より見ゆる冬田かな

参家集同人

蟋蟀抄

紅葉して



志方章子

秋深し夫との五十余年かな
深閑と夫の死のあり菊日和
小鳥来る夫みぬ家のがらんどろ
夫のこと思へば苦し秋日和
供へたるコーヒー香るそぞろ寒
あなたとの年月空しそぞろ寒
夕紅葉けんか相手のみなくなり
秋高し夫の遺影を睨みけり
紅葉して夫居ぬことを思ひ知る
秋日和そろそろ先に進まねば

参家集同人

はまなす抄

箒木紅葉



升田ヤス子

草辻りしてゐる風の朴落葉

夫の爪切りやりぬ灯の露けくて

柿を火に炙る媼や谷深く

親を看にゆきし家苞吊し柿

八千草やもう八橋に従はず

ゾルームーン野外シネマとなる狭庭

隼人瓜知人売り場にある日暮

日短か圧力鍋におもり揺れ

箒木紅葉牛車のごとく乳母車

臥して見るオーヘンリーの枯一葉

参家集同人

聖五月抄

露けき穂



善野 行

小鳥来る音に願ひの独言

膚打つ風の廊下や神無月

豊秋の風に生きよと吹かれけり

田の隅を刈るや露けき穂を重ね

夢よりも亡き友近く露の声

愉しさのあふれてをりぬ秋桜

池の土手までコスモスの花の床

悶絶の手にコスモスを握らせよ

今年米渡せぬ人となりにけり

赤松正義さん一周忌

石路の黄の滲みてゐたる朝かな

参家集同人

遊野抄

秋思の



住田千代子

紫がやつぱり好きと葡萄吸ふ

種なしの葡萄にありぬ謎の種

コスモスの揺れに遊べる蝶蜻蛉

心地よき風に障子を洗ひけり

石落咲いて虫の羽音の忙しさよ

団栗や小さき地蔵の膝頭

けふ残る四枚の障子洗ひけり

露草の目覚めの色といへる青

奉納の秋思の大き草鞋かな

秋明菊こころ穏やかなりし時

六花集

草場つくし

十五夜や床就く前にもう一度
椎の実やかじり甘さの遠き目よ
秋遍路足をのぼせる道後の湯
今日も又ゆうげの支度うそ寒し
踏み出しは大きく一歩いわし雲

北村ちえ子

強風に虎杖折れる草の道
椿落ち拾つてゐるは女の子
新盆や友人宅の柵の前
誰も来ぬ墓にお花を供へて来る
帰宅する目印になる実南天

菊谷 潔

勝ち誇る虫の音すぎき三日の月
気がつけば昨日と変わるすがれ虫
すがれ虫塚の由来はその昔
吹く風に塚はむなしきすがれ虫
世は病んで山野のどかに紅葉かな

磯野青之里

人間の真顔になりて菜虫捕る
銀杏を拾へば吾子の限も無し
漱石の猫の欠伸や文化の日
練炭に糲殻ごとの黒き艶
転んでも知らんぷりなりおんぶばった

六花集作品鑑賞

▽つくしさんの「十五夜」の句、たしかに
そういう名残の気持ちが起こる。充分に中
秋の名月を楽しんだのに、寝る前にもう一
度しっかりと目に刻んで眠りにつく。尾崎放
哉に「こんなよい月を一人で見て寝る」と
いう句があるように名月の魅力は限りな
い。話は飛ぶが、「銀閣寺」を造つた理由
が「明月を愛でて遊ぶため」ということを
以前に知った。月光に反射する辰砂などを
壁に使つて一晩中楽しむ宴を尽くしたから
眠るひまなどなかったという説もある。
▽潔さんの句、世の中は今まさに病んでい
る。その証拠にコロナウイルスなど疫病が
流行る。だが、山野の草木は秋を迎え人の
騒ぎをよそに今年もおだやかな紅葉の季節
が巡り来た。醒齋（あくせく・そく）とし

た人の世の営みをしり目に季節の移り変わ
りを楽しんでいるのである。何だが徒然草
の世界観。
▽ちえ子さんの句、墓にお花を供えるのは、
お盆の句で、節季にはだれか縁の人がお墓
詣りにきていたが、今は参る人もなく故人
もさみしいであろうから、ちえ子が参つて
やるのだ。その優しさに心打たれる。「情
けは人のためならず」をおしえられる。
▽青之里さんの句、おんぶばったは「交尾
の際に観察されるが、他のバツタ類が速や
かに離れるのに対し、オンブバツタは「交
尾時以外でもオスがメスの背中に乗り続け
る」という。だから転んでもオスは、はな
れるまでおなじ姿勢なのだ。オスは気楽で
ある。

遠汽笛止みて時雨るる音のあり 廣畑育子

とおぎてきちみてしんぐふおのおとのあり ひろはたいくこ

初秋や洗ひし服のほろぬくき
寶石のごとく野葡萄掌に包む
草の実を付けて帰りぬ呑気夫
露けき夜列車の音の河口へ来
露けき夜赤毛のアンを読みをりぬ
迷ひ犬露けきからだしてをりぬ
遠汽笛止みて時雨るる音のあり
飽きぬ程煌めきをりぬ草の露
アーケード抜ければ銀杏黄葉かな
川時雨相も変わらず鯉飛び

汽笛に消えていた時雨の音が、列車の汽笛が遠くへ尾を引いて去ると、時雨の音が入れ替わって聞こえてきた。というのが眼目。人の耳はいろいろな聞き方をする。聞こえていた時雨の音が、音の大きい汽笛の方に引き摺られ遮られたのだ。列車が去ると時雨の音が戻ってきた。その人間の不思議な音の聞き方に作者は気づいた。そしてそれを読者に気づかせた。